

食品嗜好の適応性に

関する研究

長野県立保育専門学院 小松 卓郎

諏訪市豊田診療所 矢島 千代

日常のあらゆる努力や一般知識の普及にもかかわらず、倫食矯正への抵抗には根強いものがある。さきに新潟大学儀間博士および鈴木博士は小坂動態的体質学において、SE型とWM型とは、消化器の生体機能および基礎代謝に対蹠的な差異のあることを明きらかにした。よってわれわれは、倫食には、単なる環境的なもののみではなく、体質的なもののある事を想定して、園児・小・中・高校生および成人（工場、農村）など、計二八九〇名について、偏食の基盤とも解される食品嗜好の実態を調査し、食品各別、類別、系別の外、調理法をも含む総合的な嗜好角度を追究した。その結果、SE型は明きらかに「しつこい味つけ（脂肪性）の食品」肉食系への嗜好性を示し、WM型は「あっさりした味つけの食品」野菜、含水炭素系への嗜好性を示すのを認め、且つまた、前者は刺戟興奮性の、後者は非刺戟性の嗜好飲料、さらに前者は「食欲のむら」多く、後者は少ないなどの成績を得、総合的にSE型は動物性、WM型は植物性食品に——儀間、鈴木両氏の業績と照合すれば、それぞれの体質に適応した嗜好に傾くことを立証した。その反面、この傾向に反する食品の強制は、園児に食卓または食品ノイローゼ、抵抗ないし反抗、劣等感、虚偽、羨望、身体障害などの犠牲をもたらすような諸

経験例の多数を得、さらに、倫食見必ずしも虚弱多病とは、軽卒に断定し得ない既往症および罹病傾向の成績と、これを裏づけるかのごとき家庭での観察成績の若干を得て、ここに本課題の基礎的研究の一部として報告した。すなわち本研究の目的は、倫食の肯定ではなく、偏食の要因には根強い体質的なもののあることを明きらかにすることによって、矯正にはその体質適応の嗜好方向から進むべきものとする——その科学的論拠を得んとしたものに外ならない。

遊具の所有化される過程（第3報）

新潟県柏崎高等実践女学校

桑 田 明 子

前二回の研究に引き続き今回も遊具の所有化される過程についての研究である。第一回の研究は東京の新宿にあるデパートの玩具売場で観察をおこなったがその対象は主として山の手階層の子どもとその親であった。第二回の研究目的は遊具の所有化の過程が地域によってどのように相違するかみようととして場所は工場街を背景にしている川崎の「さいかや」デパートでおこなった。今回の研究は更に農村を背景とした地方都市である新潟県長岡市の「大和デパート」を選んだ。観察の対象となったケースは五七ケースである。結果の整理は第1は所有化の型、第2は親子関係と禁止の数、第3は禁止の理由、第4は親子関係と玩具要求数、第5は年令との関係、第6は同伴者との関係、第7は満足状態についておこなった。観察の対象となつた五七ケースの内訳は幼稚園以下と思われるもの一八、幼稚園々